

## 10 属性・学業・意識からみた職種の選択

芝田 麻奈美

### はじめに

同志社大学社会学部2009年度の卒業生において、卒業後の進路の職種別構造について分析する。一体どんな学生が、各職種の進路を選ぶのであろうかというのが、この分析の動機である。その分析を主に3つに分けて行う。1点目に、男女別や学科別といった**属性**による分析、2点目にGPAの差や学業への取り組み方といった**学業**による分析、そして3点目に学生生活への満足度といった**意識**による分析という、3方向から分析を行う。

まず、問26(2)でたずねている職種は14種類の選択肢から構成されているが、このままでは分析を行うことがむずかしい。ここで、この職種の分類を次のように整理する。

- ・1「決まっていない」(67人)を非該当として分析からはずす。
- ・度数分布で10ケースに達しない、5「運輸・通信」、6「保安」、11「その他の専門職」12「製造業」13「農林漁業」の計21ケースを非該当として分析からはずす。
- ・8「教員」、10「介護・福祉系」を合わせて「資格系」とする。

その上で、度数分布をとると以下ようになる。これを、以下では職種6分類として用いる。

		職種6分類			
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	事務職	70	17.4	30.2	30.2
	営業職・販売職	88	21.9	37.9	68.1
	技術職(SE職)	22	5.5	9.5	77.6
	サービスの仕事	18	4.5	7.8	85.3
	マスコミ関係	14	3.5	6.0	91.4
	資格系	20	5.0	8.6	100.0
	合計	232	57.7	100.0	
欠損値	97	88	21.9		
	システム欠損値	82	20.4		
	合計	170	42.3		
合計		402	100.0		

これ以上の整理統合は、カテゴリーの本来の意味をなくしてしまうと判断した。

では、こういった卒業後の職種には、一体どんな属性の学生で構成されているのか。それぞれについて、分析していくことにしよう。

## 10.1 属性と職種

ここでは、性別、学科、現役・浪人別、入試の種類別の4つの属性から、卒業後の職種との相関があるのかを調べていく。まず、性別と職種の相関があるのかについて調べてみよう。

職種6分類 と q1[性別] のクロス表

		q1[性別]		合計	
		男性	女性		
職種6分類	事務職	度数	22	47	69
		職種6分類の%	31.9%	68.1%	100.0%
	営業職・販売職	度数	51	37	88
		職種6分類の%	58.0%	42.0%	100.0%
	技術職(SE職)	度数	10	11	21
		職種6分類の%	47.6%	52.4%	100.0%
	サービスの仕事	度数	6	12	18
		職種6分類の%	33.3%	66.7%	100.0%
	マスコミ関係	度数	5	9	14
		職種6分類の%	35.7%	64.3%	100.0%
	資格系	度数	5	15	20
		職種6分類の%	25.0%	75.0%	100.0%
合計		度数	99	131	230
		職種6分類の%	43.0%	57.0%	100.0%

p<.01

上の表からわかることは、営業・販売職と技術職において男女差はほとんどないということである。また、資格系をはじめ、事務職、サービス職、マスコミ関係では女性のほうが多いことがわかる。

次に、5つの学科ごとによる、卒業後の職種に差はあるのか。その相関について調べてみることにする。(次ページの表を参照。)

- ・**社会学科**の特徴は、事務職と営業・販売職とその他が3分の1ずつバランス良く分布していることで、技術職の割合も5学科中で最も多いことである。ただし、資格系はまったくいない。

- ・**社会福祉学科**は、5学科中で事務職と資格系が最も多い。これはこの学科に女性が多いことを反映し

ている。他方で、マスコミ関係はまったくいない。

・**メディア学科**は、比較的に事務職が少なく、営業・販売職が多い。また、学科の性質上、当然ながら、マスコミ関係の割合が5学科中で最も多い。逆に、技術系が最も少ない。

・**産業関係学科**は、営業・販売職が全体の4分の3近くで非常に多く、逆に事務職の割合が5学科中で最も少ない。サービス関係と資格系もない。以上のことは、この学科に男性が多いことを反映している。

・**教育文化学科**は、サービスの仕事の割合が5学科中で最も多く、営業・販売職が最も少ない。また、資格系が社会福祉に次いで多く、マスコミ関係はいない。全体としてはバランス良く分布している。

q2[学科・専攻] と 職種6分類 のクロス表

		職種6分類						合計
		事務職	営業職・販売職	技術職(SE職)	サービスの仕事	マスコミ関係	資格系	
q	社会	20	19	9	5	2	0	55
2[	学	36.4%	34.5%	16.4%	9.1%	3.6%	.0%	100.0%
学	社会	23	16	4	3	0	11	57
	福祉	40.4%	28.1%	7.0%	5.3%	.0%	19.3%	100.0%
・	メデ	9	19	1	4	11	2	46
	イア	19.6%	41.3%	2.2%	8.7%	23.9%	4.3%	100.0%
専	産業	5	22	2	0	1	0	30
	関係	16.7%	73.3%	6.7%	.0%	3.3%	.0%	100.0%
攻	教育	13	12	6	6	0	7	44
	文化	29.5%	27.3%	13.6%	13.6%	.0%	15.9%	100.0%
]	合計	70	88	22	18	14	20	232
		30.2%	37.9%	9.5%	7.8%	6.0%	8.6%	100.0%

p<.001

次に、学生の現役・浪人別における、職種選択の違いというものはあるのか？という仮説を調べてみる。(次ページの上のクロス表。)しかし、その結果は、職種に関しては現役生か浪人生かで有意な差は見られなかった。

そこで、ついでに大学入学時の志望順位で調べてみる(次ページの下のクロス表)と、意外にはっきりとマスコミ関係やサービスの仕事に就いた人の第1志望率が高かったことがわかる。やはり、入学時に明確な目的をもって志望する人が多いのだろう。反対に、技術職を見ると、第1志望率が低かったことがわかる。社会学部の内容からして、あまり関係ないことを反映しているのだろうか。

		q5[現役・浪人の別]		合計	
		現役	浪人		
職種6分類	事務職	度数	48	20	68
		職種6分類の%	70.6%	29.4%	100.0%
	営業職・販売職	度数	57	27	84
		職種6分類の%	67.9%	32.1%	100.0%
	技術職(SE職)	度数	15	6	21
		職種6分類の%	71.4%	28.6%	100.0%
	サービスの仕事	度数	13	5	18
		職種6分類の%	72.2%	27.8%	100.0%
	マスコミ関係	度数	10	3	13
		職種6分類の%	76.9%	23.1%	100.0%
	資格系	度数	15	5	20
		職種6分類の%	75.0%	25.0%	100.0%
合計		度数	158	66	224
		職種6分類の%	70.5%	29.5%	100.0%

職種6分類とq4[志望順位]のクロス表

		q4[志望順位]		合計	
		第一志望	第一志望以外		
職種6分類	事務職	度数	35	34	69
		職種6分類の%	50.7%	49.3%	100.0%
	営業職・販売職	度数	49	37	86
		職種6分類の%	57.0%	43.0%	100.0%
	技術職(SE職)	度数	10	12	22
		職種6分類の%	45.5%	54.5%	100.0%
	サービスの仕事	度数	13	5	18
		職種6分類の%	72.2%	27.8%	100.0%
	マスコミ関係	度数	13	1	14
		職種6分類の%	92.9%	7.1%	100.0%
	資格系	度数	10	10	20
		職種6分類の%	50.0%	50.0%	100.0%
合計		度数	130	99	229
		職種6分類の%	56.8%	43.2%	100.0%

p<.05

		q18[自宅・下宿の別]		合計	
		自宅	下宿		
職種6分類	事務職	度数	47	23	70
		職種6分類の%	67.1%	32.9%	100.0%
	営業職・販売職	度数	42	46	88
		職種6分類の%	47.7%	52.3%	100.0%
	技術職(SE職)	度数	12	10	22
		職種6分類の%	54.5%	45.5%	100.0%
	サービスの仕事	度数	9	9	18
		職種6分類の%	50.0%	50.0%	100.0%
	マスコミ関係	度数	4	10	14
		職種6分類の%	28.6%	71.4%	100.0%
	資格系	度数	11	6	17
		職種6分類の%	64.7%	35.3%	100.0%
合計		度数	125	104	229
		職種6分類の%	54.6%	45.4%	100.0%

p=.056

上の表は、自宅・下宿生別に、職種の構成を比較したものである。すると、あまり明確ではないものの、事務職や資格系には自宅生が多く、マスコミ関係や営業販売職には下宿生が多いことがわかった。

次に、入学時の入試の種類（一般入試・センター入試、推薦入試・AO入試、内部校推薦）の違いは、職種に影響するのかわかるとについて分析してみよう。（次ページの表を参照。）

その結果、あまり入試形態による職種の差は見いだせなかったが、サービスの仕事には推薦・AO入試の割合が他の職種に比べて高いこと、また、マスコミ関係は、内部校出身者が多いことがわかった。

## 10.2 学業と職種

ここでは、GPAや、授業への取り組み方としての予習・復習、欠席・遅刻といった大学生活における学業に対する態度が、卒業後の職種に関連があるのかについて分析していく。

まず、学業成績を端的にあらわすGPAが、卒業後の職種に関係するのかわかるとを、調べてみよう。（次ページの下表を参照。）その結果、まず事務職に高得点の人が多かった。これは女性が多いからだろうか。また資格系も高得点の割合が高い。反対に、技術職やサービスの仕事は低得点が多い。マスコミ関係は、高い層と低い層の両極端に分かれている。ただし、全体的に目立った相関は見られない。

		q6[入試の種類]			
		一般入試・センター			
		利用入試	推薦入試・AO入試	内部校推薦	合計
職種6分類	事務職	53	6	9	68
		77.9%	8.8%	13.2%	100.0%
	営業職・販売職	68	3	13	84
		81.0%	3.6%	15.5%	100.0%
	技術職(SE職)	16	2	3	21
		76.2%	9.5%	14.3%	100.0%
	サービスの仕事	11	4	3	18
	61.1%	22.2%	16.7%	100.0%	
	マスコミ関係	8	1	3	12
		66.7%	8.3%	25.0%	100.0%
	資格系	14	2	4	20
		70.0%	10.0%	20.0%	100.0%
合計		170	18	35	223
		76.2%	8.1%	15.7%	100.0%

		q7[GPA]				
		2.00未満	2.00～2.49	2.50～2.99	3.00以上	合計
職種6分類	事務職	10	18	14	25	67
		14.9%	26.9%	20.9%	37.3%	100.0%
	営業職・販売職	20	21	20	20	81
		24.7%	25.9%	24.7%	24.7%	100.0%
	技術職(SE職)	4	9	4	4	21
		19.0%	42.9%	19.0%	19.0%	100.0%
	サービスの仕事	4	6	5	3	18
	22.2%	33.3%	27.8%	16.7%	100.0%	
	マスコミ関係	4	3	2	5	14
		28.6%	21.4%	14.3%	35.7%	100.0%
	資格系	1	6	7	6	20
		5.0%	30.0%	35.0%	30.0%	100.0%
合計		43	63	52	63	221
		19.5%	28.5%	23.5%	28.5%	100.0%

次に、授業への取り組み方において、きちんと予習・復習をしていたかなどの態度は、卒業後の職種に影響があるのか？という仮説について調べてみる。下の表は、問14のaからeまでの5項目について、「あてはまる」＝1点から「あてはまらない」＝4点までの平均点を比較したものである。各項目で最も積極的な授業態度を示している職種の平均点に網掛けを、またもっともそうでない職種の平均点に下線をつけた。

そこで明らかになったことは、aからdまでの4項目において最も積極的な態度を示しているのが、マスコミ関係に就職した人たちであることだ。(ただし、彼らは同時に最も遅刻と欠席をよくする。) 反対に、遅刻欠席は最も少ないものの、教員への質問も最も少ないのが資格系の人たちである。なお、ディスカッション、予習復習、ゼミ発表の準備の三つにおいて最も消極的なのがサービスの仕事に就く人々だった。

職種6分類		q14a[授業への取り組み 方: 教員に質問]	q14b[授業への取り組み方: ディスカッションに参加]	q14c[授業への取り組み 方: 授業の予習・復習]	q14d[授業への取り組み 方: ゼミ発表の準備]	q14e[授業への取り組み方: 授業に遅刻・欠席]
事務職	平均値	2.81	2.33	3.01	1.72	2.99
	度数	70	70	70	69	69
営業職・販売職	平均値	2.81	2.33	3.00	2.02	2.57
	度数	88	88	88	88	88
技術職 (SE職)	平均値	2.68	2.55	2.95	1.86	2.77
	度数	22	22	22	22	22
サービスの仕事	平均値	3.00	<u>2.61</u>	<u>3.33</u>	<u>2.06</u>	2.83
	度数	18	18	18	18	18
マスコミ関係	平均値	<u>2.14</u>	<u>1.93</u>	<u>2.86</u>	<u>1.71</u>	<u>2.43</u>
	度数	14	14	14	14	14
資格系	平均値	<u>3.11</u>	2.39	3.11	1.89	<u>3.00</u>
	度数	18	18	18	18	18
合計	平均値	2.80	2.35	3.03	1.89	2.76
	度数	230	230	230	229	229

次のページの表は、大学での授業を通して向上した知識や技能について、問16のaからhまでの8項目について、「向上した」＝1点から「低下した」＝4点までの平均点を職種ごとに比較したものである。各項目で最も向上したと回答している職種の平均点に網掛けを、またもっともそうでない職種の平均点に下線をつけた。

その結果、8項目中で6項目までに最も向上感が強かったのがメディア関係に就職した人たちである。また、aが最も向上したのが技術系、hは事務職だった。逆に、総じて向上感が低かったのが、サービス系と

技術職だった。また、外国語や異文化理解への向上感が最も低いのが営業・販売職である。

職種6分類		q16a[根拠を示し簡潔に書く]	q16b[考えや意見を他人に伝える]	q16c[物事を多面的に考える]	q16d[文献や資料を読み解く]
事務職	平均値	1.79	1.87	1.60	1.74
	度数	70	70	70	70
営業職・販売職	平均値	1.78	1.81	1.78	1.89
	度数	88	88	88	88
技術職(SE職)	平均値	1.68	1.91	1.82	1.95
	度数	22	22	22	22
サービスの仕事	平均値	1.94	1.94	1.72	1.72
	度数	18	18	18	18
マスコミ関係	平均値	1.71	1.57	1.57	1.71
	度数	14	14	14	14
資格系	平均値	1.88	1.76	1.82	1.76
	度数	17	17	17	17
合計	平均値	1.79	1.83	1.72	1.82
	度数	229	229	229	229

職種6分類		q16e[文献や資料を探す]	q16f[数量的に分析する]	q16g[外国語]	q16h[異文化の理解]
事務職	平均値	1.77	2.34	2.79	1.74
	度数	70	70	70	70
営業職・販売職	平均値	1.86	2.53	2.97	2.16
	度数	88	88	88	88
技術職(SE職)	平均値	2.09	2.41	2.91	2.14
	度数	22	22	22	22
サービスの仕事	平均値	1.72	2.78	2.83	2.06
	度数	18	18	18	18
マスコミ関係	平均値	1.57	2.21	2.31	1.86
	度数	14	14	13	14
資格系	平均値	1.88	2.53	2.82	2.12
	度数	17	17	17	17
合計	平均値	1.83	2.46	2.85	2.00
	度数	229	229	228	229



### 9.3 満足度と職種

最後に、大学生活における授業満足度、卒業後の進路満足度、学生生活全般に関する意識、大学選択の意識といった個々の意識について、卒業後の職種とどの程度相関があるのかについて分析する。まず、大学で受けた教育全般に対する満足度と、卒業後の職種に相関があるのかについて、調べてみることにする。

職種6分類と大学教育全般への満足度のクロス表

	大学教育全般への満足度			合計
	満足	どちらかといえば満足	どちらともいえない	
職 事務職	16	39	14	69
種	23.2%	56.5%	20.3%	100.0%
6 営業職・販売職	12	42	34	88
分	13.6%	47.7%	38.6%	100.0%
類 技術職(SE職)	1	10	11	22
	4.5%	45.5%	50.0%	100.0%
サービスの仕事	4	7	7	18
	22.2%	38.9%	38.9%	100.0%
マスコミ関係	3	5	5	13
	23.1%	38.5%	38.5%	100.0%
資格系	4	9	4	17
	23.5%	52.9%	23.5%	100.0%
合計	40	112	75	227
	17.6%	49.3%	33.0%	100.0%

上の表から、弱い相関ながら、事務職の満足度が比較的高く、技術職の不満があることがわかる。

次に、卒業後の進路満足度について、卒業後の職種と関連があるのか調べてみよう（次ページ上の表）。こちらにも、やや弱い相関ながら、サービス系やマスコミ関係の職への高い満足度が得られた。また、反対に技術職への不満がみられた。

さらに、大学生活充実に関する意識と、それが直接卒業後の職種に影響しているのかについて調べてみる（次ページ下の表）。クロス表からは明確な相関関係を読み取れなかったが、資格系の仕事に就いた人たちには大学生活への高い充実感がうかがえる。やはり、資格系の仕事は日頃の努力の積み重ねがダイレクトに就職につながる人が多いので、それが充実感につながっているのだろうか。

		進路への満足度			
		満足	どちらかといえば満足	どちらともいえない	合計
職 事務職		44	14	12	70
		62.9%	20.0%	17.1%	100.0%
6 営業職・販売職		38	29	21	88
		43.2%	33.0%	23.9%	100.0%
分 技術職(SE職)		6	10	6	22
		27.3%	45.5%	27.3%	100.0%
類 サービスの仕事		14	4	0	18
		77.8%	22.2%	.0%	100.0%
マスコミ関係		10	4	0	14
		71.4%	28.6%	.0%	100.0%
資格系		11	6	3	20
		55.0%	30.0%	15.0%	100.0%
合計		123	67	42	232
		53.0%	28.9%	18.1%	100.0%

p<.05

		学生生活の充実度			
		充実していた	どちらかといえば充実していた	どちらともいえない	合計
職 事務職		46	17	7	70
		65.7%	24.3%	10.0%	100.0%
6 営業職・		52	22	14	88
	販売職	59.1%	25.0%	15.9%	100.0%
分 技術職		9	9	4	22
	(SE職)	40.9%	40.9%	18.2%	100.0%
類 サービス		11	6	1	18
	の仕事	61.1%	33.3%	5.6%	100.0%
マスコミ		8	6	0	14
	関係	57.1%	42.9%	.0%	100.0%
資格系		15	3	2	20
		75.0%	15.0%	10.0%	100.0%
合計		141	63	28	232
		60.8%	27.2%	12.1%	100.0%

最後に、大学の選択に関する意識（もし大学を選びなおせたら、もう1度、本学に入学しますか？という問い）と、卒業後の職種は関連があるのかについて調べてみる。

職種6分類と大学への愛着度 のクロス表

	大学への愛着度			合計
	入学する	たぶん入学する	どちらともいえない	
職 事務職	32	20	18	70
種	45.7%	28.6%	25.7%	100.0%
6 営業職・販売職	42	23	23	88
分	47.7%	26.1%	26.1%	100.0%
類 技術職(SE職)	6	7	9	22
	27.3%	31.8%	40.9%	100.0%
サービスの仕事	13	2	3	18
	72.2%	11.1%	16.7%	100.0%
マスコミ関係	7	6	1	14
	50.0%	42.9%	7.1%	100.0%
資格系	11	5	4	20
	55.0%	25.0%	20.0%	100.0%
合計	111	63	58	232
	47.8%	27.2%	25.0%	100.0%

この大学への愛着度に関しては、サービス系の強さと技術系の低さを指摘できるが、全体としては有意な相関が見られなかった。ただし、意識項目に関して、技術系の人は一貫してネガティブな反応を示している。

## 10.4 まとめ

以上のように、卒業後の職種6分類を軸として、個々の学生の属性、学業、意識に関してどのような相関があるのか分析してきた。

相関があったものとして挙げられるものが、性別や学科別など属性に関するもの、大学での学業に関するものなどであった。やはり、性別や学科別といった違いが、卒業後の職種に関連するということが明確となった。例えば社会福祉学科であれば、資格系の仕事（介護・福祉関係）に進む人が他の学科に比べて多かったり、教育文化学科でも教員など資格系の仕事に進む人も多くいる。少なからず、学科の教育内容や男女比の差が、その後の職種選択に影響しているといえる。

他方、学業面と職種の間において、そのように明確な相関を見いだすことはできなかったが、やはり、資

格系の仕事に就くためには良い成績が必要なようだ。また、授業への態度としてはマスコミ関係の人たちの積極性が目立った。彼らは同時に学生生活における知識や技能の向上感も強かった。逆に、営業・販売職では、外国語や異文化理解に苦手意識が現れる面もあった。意識面と職種の間接的相関を見いだすことはさらに難しく、技術職の一貫したネガティブな反応が目立った。

ただし、この分析で注意しなければいけないのは、全体の7割までが事務職と営業・販売職で占められていることであり、その他の職種の特徴を一般化することには慎重であるべきということだ。また、事務職をしばしば一般職的に位置づけがちであるが、よく数字を見れば、民間企業や公務員の男性も事務職としていくことが多い。さらに、営業・販売職にも4割以上の女性がおり、技術職やマスコミ関係ではむしろ女性の方が多。したがって、男性に比べて女性の就職先の方が多様化しているのが実態というべきであろう。

また、今回は分析の対象にしなかった、また職種が「決まっていない」67名はほぼ全員が総合職と答えているので、この人たちの多くは営業・販売職なり事務職に就くことが予想される。それを加えれば、さらに職種の持つ意味は変わってくるだろう。